プロジェクト報告：初習言語の派遣留学生の実力養成に向けた効果的なサポート体制（授業内・授業外）の構築を目指して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉村, 安幾子, 早川, 文人, 三上, 純子, 平松, 潤奈, 趙, 菁, Sugimura, Akiko, Hayakawa, Fumito, Mikami, Junko, Hiramatsu, Junna, Zhao, Jing メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00050427

プロジェクト報告：
初習言語の派遣留学生の実力養成に向けた
効果的なサポート体制（授業内・授業外）の構築を目指して

Project Report:
Development of an Effective Support System for a Foreign Language Proficiency Training Program (in Languages Other than English) for Students Studying Abroad

杉村 安幾子・早川 文人・三上 純子・平松 潤奈・趙 菁
Akiko SUGIMURA, Fumito HAYAKAWA,
Junko MIKAMI, Junna HIRAMATSU, and Jing ZHAO

Abstract

This article reports the results of a three-year education project (from 2015 to 2017) conducted by the Faculty of Foreign Language Studies of the Institute of Liberal Arts and Science. This project aimed developed an effective education system inside and outside of classes for students preparing to study abroad or continuing learning after coming back from studying abroad. According to the analysis of the investigation into the students' actual learning requirements, we consider the further possibilities of learning support provided by teachers.

１．はじめに――プロジェクトの趣旨

近年、本学における派遣留学実績は、50 名前後でほぼ横這い状態が続いている。[1] 内訳を詳しく見ると、毎年ほぼ必ず初習言語を学ぶために留学をする学生が各言語で数名ずつおり[2]、派遣留学実績において、初習言語を学ぶための留学が実はかなりのパーセンテージを占めていることがわかる。英語圏への留学については、多くの大学が TOEFL-iBT や

[1] 『STUDY ABROAD 2016　KANAZAWA UNIVERSITY～金沢大学生のための派遣留学の手引き～』（金沢大学国際機構支援室、2017）によれば、過去 5 年間の実績は 2011 年度が 42 名、2012 年度が 39 名、2013 年度が 45 名、2014 年度が 61 名、2015 年度が 49 名である。

[2] 留学先国がいわゆる「非英語圏」であっても、交流協定大学での授業が英語で行われている場合、英語力向上のために留学する学生も多い。一方、北米カナダのモントリオール大学への留学実績は全てフランス語習得のためのものである。本稿における初習言語習得のための留学先国・地域は、ドイツ語の場合はドイツ、フランス語はフランスとカナダ、ロシア語はロシア及び NIS 諸国、中国語は中国及び台湾である。協定校については金沢大学 HP 中の以下を参照されたい。
https://sgu.adm.kanazawa-u.ac.jp/international/agreement/university.html

IELTS のスコアを要求しているため、派遣留学の学内審査において合格内定を貰ったとしても、留学を希望する学生の全員が留学できる訳ではないという制約があるが、初習言語を学ぶための留学については、なるべく多くの学生を派遣させたいという大学の方針の下、可能な限り学生達を留学希望先国に送り出しているという現状がある。

大学入学以前に中学・高校における 6 年間の学習歴がある英語と異なり、初習言語を海外で学ぶために留学する学生の多くは、大学入学後に初習言語を学び始め、当該言語の中級・上級クラスの履修を経、留学した者達である。もっとも、留学前の当該言語の実力は千差万別であり、甚だしい例としては、ごく簡単な挨拶すら聞き取れないこともある。しかし、外国留学が外国語能力の向上だけではなく、何物にも代え難い貴重な経験になるであろうという判断によって、単に当該言語の運用能力が低いというそれだけの理由では派遣留学の審査で不合格になることはない。この点においては、派遣留学を希望する学生へのより良い教授法・指導法が模索され続けて久しい。

また他方では、留学から帰国した学生への指導・支援も常に課題となっている。留学帰国生は身につけた外国語能力の維持、或いは更なる向上を目指し、初習言語科目 C（上級クラス）を履修することになるが、大抵は同じクラスに留学前の学生や留学は考えていない学生がおり、それらの学生間の当該言語の運用能力やモチベーションの差異は大きい。結果として、履修している全ての学生が何らかの不満（「レベルが高過ぎる」、「レベルが低すぎる」）を抱えていることが多く、C を担当する教員の授業運営は容易ではない。

そのような授業や学生指導の過程で、初習言語を主に初級から教授する教員を擁する国際基幹教育院外国語教育系所属の初習言語担当教員は、派遣留学を希望する学生及び派遣留学から帰国した学生への、いわば留学の前後における有効な学習支援・指導法を考えるために、プロジェクト「初習言語の派遣留学生の実力養成に向けた効果的なサポート体制（授業内・授業外）の構築を目指して」を企画した。本プロジェクトは 2015 年度に立ち上げ、2015 年度から 2017 年度までの 3 年間に亘り次の 3 点の作業を行なった。

(1)　派遣留学帰国学生を対象にアンケートを実施

(2)　上記（1）のアンケート結果の集計・分析・考察

(3)「初習言語アワー（後述）」の開催

具体的な活動報告を以下にまとめる。

2015 年度

① 11 月、アンケート調査の実施

② 2 月 22 日、2015 年度第 3 回 FD 研究会「初習言語の派遣留学生の実力養成に向けた効果的なサポート体制の構築を目指して:派遣留学生を対象としたアンケートの結果報告」

アンケートの集計結果の報告後、留学生サポートの充実に向けて議論を行なった。このアンケートにおいて、全ての言語の調査結果に共通していたのは、「留学帰国後に、留学し

た言語圏から来た外国人留学生と一緒に学べる授業」への学生の強い期待であることが判明した。これに対しては、幾つかの対策案が挙げられ、議論が交わされた。

2016 年度

① 11 月、アンケート調査の実施

② 12 月から 1 月、「初習言語アワー」の開催

これは前年度の②を受け、語学研修や派遣留学を志す学生を主たる対象とし、学生の学修支援および学生同士の主体的・積極的コミュニケーションを目的として、授業内において本学学生と留学生との交流および会話練習の場を設けたものである。終了後の学生の感想によれば、日本人学生・留学生双方ともにかなりの好感触であり、学生の初習言語によるコミュニケーション能力の向上及び積極的な学習態度の養成に資する点があった。

③ 12 月 2 日、2016 年度第 4 回 FD 研究会「新潟大学の初修外国語の現状と展望」

講師として、独自の先端的な初修外国語カリキュラムを実施している新潟大学から人文社会・教育科学系教授／教育・学生支援機構グローバル教育センター初修外国語部門長 番場俊先生、教育・学生支援機構グローバル教育センター准教授 アンニャ・ホップ先生をお招きした。新潟大学は文科省「特色ある大学教育支援プログラム（特色 GP）」（2007 年度）にも採択されたことがあり、番場先生には当該プログラムの趣旨やカリキュラム設計・運営の観点から新潟大学における大胆な取り組みを、ホップ先生にはカリキュラムの中でも特に評価の高いドイツ語の授業実践についてご紹介頂き、本学の初習言語教育に多大な示唆を得た。

本プロジェクトに関する 2016 年度の成果として以下の 2 点を挙げる。（ともにオープンアクセス）

■ 早川文人（根本浩行との共著）「多言語学習のモチベーションとアイデンティティ――ドイツ短期留学プログラムにおける共通語としての英語とドイツ語習得」（『外国語教育フォーラム　金沢大学外国語教育論集』第 11 号、2017 年 3 月、pp.65-77）

■ 三上純子「フランス語の名詞の性の覚え方について――限られた初級レベルの語彙の学習を支援する試み」（『外国語教育フォーラム　金沢大学外国語教育論集』第 11 号、2017 年 3 月、pp.79-87）

2017 年度

① 11 月、アンケート調査の実施

② 12 月から 1 月、「初習言語アワー」の開催

前年度の初習言語アワーの好評を受けて実施。前年度同様、参加した学生からは、今後も継続して同様の企画を行なってほしい旨の声が上がっている。

③ 2 月 20 日、2017 年度第 5 回 FD 研究会「プロジェクト報告：初習言語の派遣留学生の実力養成に向けた効果的なサポート体制（授業内・授業外）の構築を目指して」の開催

本稿の基となるプロジェクト報告であり、国際機構から斉木麻利子先生をお招きし、過去 5 年における初習言語での派遣留学実績をその特徴とともにご紹介頂き、ドイツ語・フ

ランス語・ロシア語・中国語のアンケート分析報告を行なった。

本稿は本プロジェクトに参与した、ドイツ語・フランス語・ロシア語・中国語の各科目の派遣留学帰国学生を対象とした 3 年間のアンケートの結果報告であり、集計結果を通じて見えてくる課題と今後において実施可能な学習支援を考察したものである。

以下、本稿の凡例を挙げる。まず、ドイツ語・フランス語・ロシア語・中国語の順でそれぞれの特徴を分析する。文中多用される用語としては、学校教育学類を除く人文社会学域の学生が卒業に必要な初習言語 8 単位を揃えるための初級クラス「〇〇語 A」、A を修得済みで、より発展的な学習を目指す学生を対象とした中級クラス「〇〇語 B」、B を修得済みで、更に高い能力を身につけたい学生のための上級クラス「〇〇語 C」がある。また、ドイツ語・フランス語・中国語には、基本的には 1 年次後期を対象として、必修 8 単位分以外に更に学習を希望する学生向けに開講される「充実クラス」があり、「読む・書く」を中心とした「充実クラスⅠ」と「聴く・話す」を中心とした「充実クラスⅡ」に分類される。この「充実クラスⅠ」と「充実クラスⅡ」は、語学研修や派遣留学を考える学生にとっては、双方ともに履修することが望まれるが、片方のみの履修でも問題はない。

また、本稿末には資料として学生へのアンケート原文を挙げた。

（杉村 安幾子）

2. アンケートの集計結果および分析（ドイツ語）

2-1. ドイツへの派遣留学者数の推移と学類の内訳

近年、金沢大学から学生が派遣されている主なドイツの大学は、レーゲンスブルク大学、デュッセルドルフ大学、ジーゲン大学になる。金沢大学国際機構支援室調べのデータによると、ドイツへの派遣留学者数内訳は表 1 のように推移している。この 3 校に加え、2018 年度にはヴュルツブルク大学に 2 名が新たに派遣される予定である。

表 1：派遣留学者数

派遣留学者数（ドイツ）						
大学	2012	2013	2014	2015	2016	2017
レーゲンスブルク	7	4	7	3	6	4
デュッセルドルフ	2	1	3	4	4	3
ジーゲン	1	0	2	1	0	0

アンケートは、2014 年から 2016 年までの 3 年間にドイツの大学に派遣された学生 30 名を対象に行い、2014 年度は 11 名分、2015 年度は 7 名分、2016 年度は 10 名分のアンケートが回収できた。回答があった学生の所属学類は、人文学類、国際学類、経済学類、法学類であった。留学年次については、アンケートを回収した学生総数 28 名中 3 名のみ

が 2 年次の 8 月末から 9 月末にかけて留学し、残りの学生は 3 年次の同時期に留学している。

表 2 で示したように、ドイツへ留学する学生の多くは、人文学類、国際学類に所属している。人文学類には言語文化学コース、国際学類にはヨーロッパコースがあり、それらのコースに分属された学生は、専門科目の授業としてドイツ語もしくはドイツ語圏の文化・歴史に関する授業を受講し、初年度の必修 8 単位のドイツ語を履修した後も、継続してドイツ語を学習する者が多い。大学に入学してからの 2 年次、3 年次での留学は、現地で専門の授業を学ぶというよりも、いわゆる語学留学という性格が強い。しかし、留学へのモチベーション形成や留学前の学習には、所属学類で開講される専門の授業、各学類の方針、そしてアドバイス教員の助言との関係が重要であり、学生を送りだす学類と初習言語担当教員側との情報共有と相互協力体制が必要不可欠と思われる。

表 2：アンケート回収数（学類別内訳）

アンケート回収数（学類別内訳）			
学類	2014	2015	2016
人文学類	4	2	3
国際学類	5	4	6
経済学類	1	0	1
法学類	1	0	0

2-2. アンケート集計結果の分析：留学前のドイツ語学習状況について

ドイツ留学前の学生の多くは、基本的にはドイツ語 B、C に相当する講読の授業やネイティブ教員によるコミュニケーション中心の授業を週に複数コマ受講している。以下の表 3 には、派遣留学者のなかで、「充実クラス」を履修し、サマーコースに参加した人数を示した。ここではドイツへの派遣留学者は、1 年次に「充実クラス」を履修し、2 年次にはドイツでの夏季短期留学、サマーコースに参加している割合が高い点に注目する。「充実クラス」とは、後期（第 3 クォーターと第 4 クォーター）に開講されている初学者向けのドイツ語のオプションクラスであり、「充実クラス I 読む・書く」と「充実クラスⅡ話す・聞く」からなる。言語科目が卒業単位として必修 8 単位必要な学生は、週 2 コマ言語科目の受講が標準的履修スタイルであるが、意欲の高い学生はその 2 コマに加え、自由履修科目として「充実クラス」をさらに 1 ないしは 2 コマ受講できる制度が本学にはある。つまり初年度の後期には、最大週 4 コマのドイツ語の履修が可能になる。

表 3：派遣留学者の「充実クラス」受講者数およびサマーコース参加人数

留学前のドイツ語学習状況			
	2014	2015	2016
回答総数	11	7	10
充実クラス	8	2	7
サマーコース	9	5	4

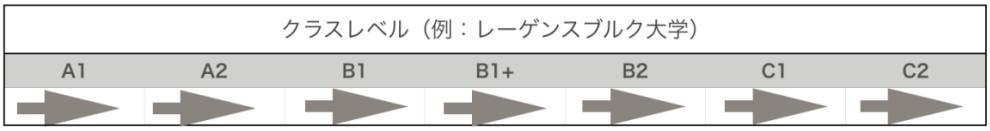
上記表 3 は、アンケートを回収した派遣留学者数の内、2014 年度は 11 人中 8 名、2015 年度は 7 名中 2 名、2016 年度は 10 名中 7 名の学生が「充実クラス I」ないしは「充実クラスⅡ」、あるいはその両方を受講しているという履修率の高さを示している。

また派遣留学生の多くが、派遣留学前の 2 年次の夏にドイツ短期留学に参加している点も注目に値する。[3]2014 年度は 11 人中 9 名、2015 年度は 7 名中 5 名、2016 年度は 10 名中 4 名の学生が短期留学に参加した。「充実クラス」および夏季短期留学は、学生の派遣留学へのモチベーション形成に大きく寄与していると言えよう。

2-3. アンケート集計結果の分析：ドイツ語運用能力の向上について

アンケート（項目Ⅱ-5）の結果から、受講した語学クラスのレベルの推移について言及し、分析を試みる。ドイツの大学の語学コースは、CEFR に基づき、A1 から C1 あるいは C2 まで段階的にレベル設定されている。各大学では、A1 のクラスは A1-1 から A1-2、B1 は B1-1 から B1-2 といったように、さらに細かくレベル分けされている。例えば、図表 1 のクラスレベルを設定しているレーゲンスブルク大学では、派遣留学生はクラス分け試験を受けた後、レベルに見あった週 8 時間の授業が軸となるコースを受講する。意欲のある学生は、さらに同レベルのオプションのドイツ語クラスも受講できるので、派遣留学生は十分なドイツ語の学習時間を確保できる。

図表 1：クラスレベル例



下記の図表 2 において、アンケートの回答があった 28 名の派遣留学者の留学時と留学

[3] ドイツ語短期留学プログラムについては以下を参照のこと。根本浩行・早川文人：多言語学習のモチベーションとアイデンティティ――ドイツ短期留学プログラムにおける共通語としての英語とドイツ語習得、金沢大学国際基幹教育院外国語教育系『外国語教育フォーラム』第 11 号、2017 年 3 月、66 頁参照。

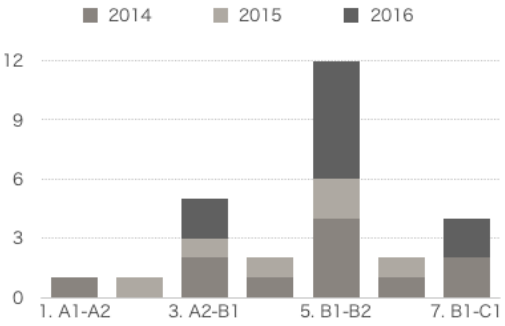
後のレベルの推移をまとめた。レーゲンスブルク大学、ジーゲン大学、デュッセルドルフ大学の語学コースのクラス設計がそれぞれ若干異なり、また年度によっても変更があるので、図表 2 ではクラスレベルの下位区分を割愛した。下位区分について一言補足しておくと、例えばクラスレベル 2 の A2 は、A2-1 から A2-2 を指し、クラスレベル 3 の A2 は A2-1 もしくは A2-2、B1 は B1-2 を指す。クラスレベル 4 と 7 の C1 は C1-1 になる。クラスレベル 5 は、B1-1 から B2-2 まで示す。クラスレベル 6 の B1 は、B1-1 から B2-2 を示している。

学生のクラスレベルの移行は通常、セメスター単位で行われる。最初に受講するクラスのレベルが A1-2 や A2-1 だった場合、1 年間の留学期間中に B2-2 や C1 に入ることが難しくなる。それゆえに留学開始時の語学コースレベル分け試験の結果が 1 年間の学習計画に大きな影響を及ぼす。レベル分け試験の結果、本人の自己評価よりも学生が下位クラスに振り分けられた場合、学習のモチベーションが下がり、最初の学期でドイツ語学習を集中的に学ぶことを辞めてしまうケースも見受けられる。そのような場合、日常生活での学生交流も極端に減ってしまい、派遣留学生活そのものに障害が生じる事態が起きかねない。

大学によっては学期前に 3〜4 週間程度の集中講座を開講している。この集中講座は、セメスターに開講されるクラスの一段階に相当するので、留学終了時の到達レベルをより高いレベルに設定したい学生、あるいは自己のドイツ語運用能力に不安を感じる派遣留学生には、受講を勧めている。

図表 2：語学クラスのレベルの推移

語学クラスのレベルの推移			
レベル	2014	2015	2016
1. A1-A2	1	0	0
2. A2	0	1	0
3. A2-B1	2	1	2
4. A2-C1	1	1	0
5. B1-B2	4	2	6
6. B2	1	1	0
7. B1-C1	2	0	2



また本学からは留学開始時に B1（B1-1）のクラスに入る学生がもっとも多いことが、図表 2 から読み取れる。この理由としては、派遣留学生の多くが、ドイツの冬学期が始まる前、3 年次の夏に留学するので、留学前のドイツ語学習時間を十分に確保している学生が比較的多いからであろう。後述するが、外国語系所属教員からのサポートとして、学生が派遣留学開始時に A2-2 もしくは B1-1 のクラスへ入ることを目指して留学準備の学習をするように助言している。2015 年度、2016 年度以降、B1（B1-1）クラスに入る学生の増加傾向にはサポート体制の成果が現れているとも言えよう。

C1 のクラスまで上がった学生 6 名（図表 2: レベル 4 と 7 の合計人数）は、「充実クラ

ス」を履修し、夏季短期留学を経験し、3 年次留学前の前期（第 1 クォーターと第 2 クォーター）に週 3 コマ以上、ドイツ語の授業を履修している。一方、留学時、図表 2 のレベル 1 と 2 に入った学生 2 名は 2 年次の夏に留学した学生である。この二名はドイツ語の学習意欲はあったものの、留学前のドイツ語学習時間を十分に確保できていなかった。派遣留学時に図表 2 のレベル 1 と 2、つまり A1(A1-2)もしくは A2(A2-1)の段階で留学に行った場合、ドイツ語運用能力の向上が思わしくない結果が出ており、留学によって当該言語の運用能力を効果的にあげるためには、留学前のドイツ語学習時間の確保とドイツ語運用能力を一定レベルまで引き上げておく必要があろう。

2-4. アンケート集計結果の分析：ドイツ語運用能力に関する自己意識の変化

アンケートの項目Ⅱ-6 とⅡ-7 の集計結果を分析し、ドイツ留学前後での自己のドイツ語運用能力に関する意識の変化を考察する。

表 4：ドイツ語運用能力に関する自己意識の変化

ドイツ留学前			
四技能	ほとんど感じなかった	少し感じた	強く感じた
読む力	1	9	18
書く力	1	14	13
聴く力	0	0	28
話す力	1	3	24

ドイツ留学後			
四技能	ほとんど感じなかった	少し感じた	強く感じた
読む力	6	18	4
書く力	7	18	3
聴く力	4	18	6
話す力	6	17	5

表 4 で示した留学前のドイツ語運用能力に関する自己意識の集計結果については、派遣留学に行く前の学生は、四技能（読む力、書く力、聴く力、話す力）全てにわたって力不足を認識している。特に「聴く力」に関しては、回答者全員が強く不足を感じている。2-6 で言及するが、学生の多くは「聴く力」「話す力」の養成の鍵はネイティブと接することが唯一の解決策だという認識に陥っている。もちろんネイティブと日常的に接する機会が持てれば、それらの能力の養成の一助になるのは間違いないが、「聴く力」に関しては各個人でも語彙力を補い、学習参考書や Web などで聴覚トレーニングをすれば改善できる余地も多く残されている。派遣留学生には聴覚トレーニングをドイツ語学習に意識的に取り込んでいくように助言している。

また表 4 からは、ドイツ留学後の学生は四技能全般に能力が高まったという意識の変化が見られた。このような意識の変化は肯定的に捉えても良いのではないか。教員側の課題としては、帰国した学生には、「ドイツ語 C（派遣後クラス）」の受講を勧め、学生が継続的に学習できる環境を整えていくことが、派遣留学経験者の自律的な学習をさらに促し、言語運用能力を向上させる契機となるであろう。

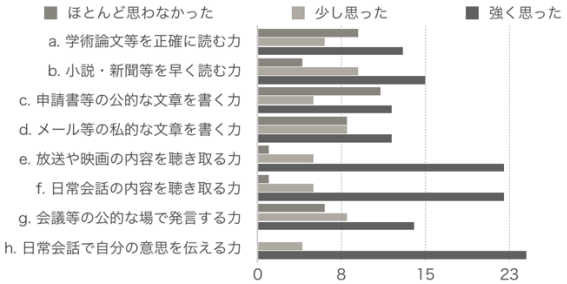
2-5. アンケート集計結果の分析：高めたい能力

アンケートの項目Ⅲ-9 の回答は、図表 3 のような結果となった。ここでは、派遣留学から帰国後の学生が留学期間で獲得した言語運用能力から､理想的な自己をどのように捉え、自己実現のための目標設定をどのように試みているかについて分析する。

図表 3：留学後に高めたいと思った能力について

2014-2016集計結果（アンケート：Ⅲ-9）

項目	ほとんど思わなかった	少し思った	強く思った
a. 学術論文等を正確に読む力	9	6	13
b. 小説・新聞等を早く読む力	4	9	15
c. 申請書等の公的な文章を書く力	11	5	12
d. メール等の私的な文章を書く力	8	8	12
e. 放送や映画の内容を聴き取る力	1	5	22
f. 日常会話の内容を聴き取る力	1	5	22
g. 会議等の公的な場で発言する力	6	8	14
h. 日常会話で自分の意思を伝える力	0	4	24



概して、留学を経験した学生からはドイツ語運用能力を総じて高めたい意欲が読みとれる。e、f、h という日常にまつわる項目の数値が高い点に関しては、日常生活において複数言語を操れる自己を理想と捉えている学生が多くいることがわかった。b についても専門的な読解能力ではなく、日常生活における速読力を高めたいという意識を持った学生が多くいると考えれば、e、f、h と同じグループに入れても良いのではないか。一方、a、c、g の項目の数値がそれほど高くない点からは、目標とする自己の姿にドイツ語運用能力がうまくリンクしていない学生も多くいることも指摘できよう。それでも a、c、g の項目を選んだ学生のなかには、3 名が国内の大学院に、1 名がドイツの大学に進学している。

ドイツ語運用能力と専門性をうまくリンクさせた 4 人に関して補足すると、アンケート項目Ⅰ-4「留学前にどのような勉強をしておくべきか？」という自由記述の質問に対して、他の多くの学生が「ネイティブと話すこと」を挙げていたなかで、「基礎的な文法事項は全て確認しておくこと」という共通した回答があった点は興味深い。日常生活での会話を学習目標においていなかったので、帰国後もドイツ語の学習に意欲的に取り組んでいた。「会話練習は現地でいくらでもできるので、まずドイツ語に関する知識をしっかり定着させておくべき」という自由記述については、これから留学する学生たちも参照すべき点はあろう。基礎的語彙や文法、定型的会話表現に関する知識に著しく欠如している場合、「聴く」「話す」能力を養成する際にも障害となる。

2-6. アンケート集計結果の分析：学習支援という点で教員・大学に望むこと

「派遣留学に関連し、特に学習支援という点で教員・大学に望むことを書いてください」（アンケートⅣ-13）という質問に対する自由記述による回答から次のような要望や意見に集約された。

1. ドイツ語のネイティブ（教員／留学生）と話す機会が欲しい。
2. 外部試験（ドイツ語技能検定試験、CEFR 準拠の検定試験）の対策講座を開いて欲しい。
3. 他の授業との兼ね合いで、ドイツ語の授業が履修できないので、時間割を工夫して欲しい。
4. ドイツへの派遣留学に外部試験の基準を設けるべきだ。

1 の「ドイツ語のネイティブと話す機会が欲しい」という学生の要望は、2-4 の表 4 の数値に現れていたように、「聴く」「話す」能力に力不足を感じ、苦手意識を持っている学生がその改善策としてネイティブとのコミュニケーションを留学前に十分に積んでおくことが重要だと考えている点から出てきた記述である。またドイツにはタンデムという互いに母語を教えあう文化が定着し、各授業で言及されているだけではなく、派遣留学を経験した学生からもその効果を耳にするので、留学前に日本でタンデムパートナーを求める傾向がある。たしかに、語学学習という側面だけではなく、留学先の情報を収集するうえでも、留学生と知り合うことは重要である。

本学には、ネイティブ教員によるコミュニケーション能力の養成に重点を置いたドイツ語の授業が複数あり、ドイツからの留学生も一定数いる。さらに学期中毎週一コマ、ドイツ語ネイティブ教員 2 名が主催する「カフェ・クラッチ」というドイツ語で会話を楽しむ時間が設けられており、そこにはドイツからの留学生や派遣留学経験者も多く集う。また本学には、留学生のチューター制度もあり、チューターとして留学生に接する機会を持つことができる。つまり、ドイツ語ネイティブと接する機会を学生が主体的に持とうとすれば、その機会は十分とは言えないまでも、現状でも持つことができる。それゆえにドイツ語ネイティブとの会話の機会を積極的に学生側からも求めていくことが重要であろう。

とはいえドイツ語学習の初年度の学生は、派遣留学を経験した先輩学生や留学生と接する機会が持ちにくい。その対策として 2016 年度から「初習言語アワー」という場を開いて、ドイツからの留学生と派遣留学経験者、そしてそこに日本人教員とネイティブ教員も加わり、情報提供と留学のモチベーション形成の契機となる場を提供した。2018 年度以降は、留学前に派遣留学生に個人指導する語学指導担当教員にできる限りネイティブ教員を配置することで、ドイツ語ネイティブとの会話の機会を持ちたいという学生の要望に応えたい。ネイティブ教員との面談制度は、特に主体的に話す機会がなかなか持てない学生への学習効果を期待している。

2 の学生からの自由記述の外部試験に関するコメントについては、ドイツ語技能検定試験だけではなく、ゲーテ・インスティトゥートが実施する CEFR に準拠した検定試験に関する要望も複数あった。2-7 でも言及するが、ドイツ語技能検定試験については、夏季試験は富山大学、冬季試験は本学で実施しているので、派遣留学生には留学前後の学習目標として設定するように助言している。一方、CEFR に準拠した検定についての対策講座を

希望する声もあったが、北陸地方で受験するのは難しい現状にあるので、なるべく留学中にゲーテ・インスティトゥートの試験を受けるように助言している。派遣留学の準備クラス（ドイツ語 C）で、受講者が CEFR A2 から B1 相当の試験問題を解く機会を受けられるようにしていきたい。

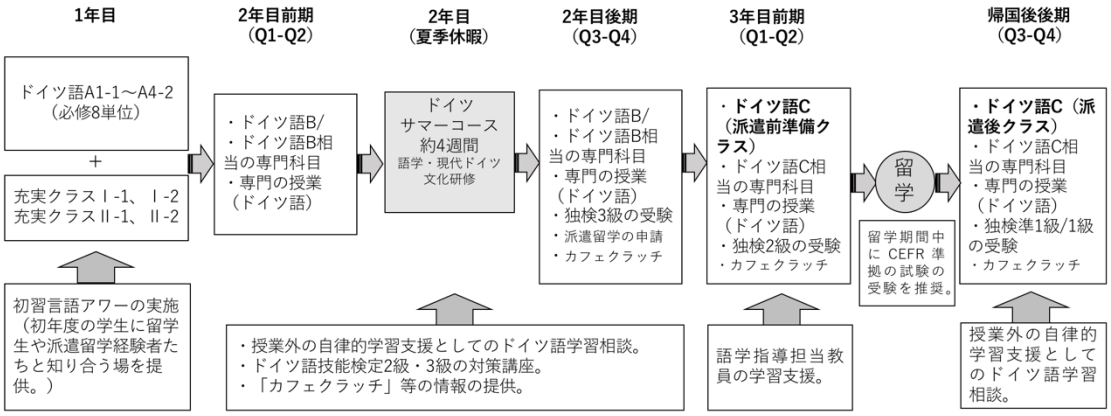
3 のように、時間割の問題についての記述も 4 件あった。「派遣留学準備クラス」や「帰国者対象のクラス」に、専門の授業や教職の授業の関係で受講できないとの声は毎年あがるので、なるべく多くの派遣留学生が準備クラスや帰国後クラスを受講できるように配慮して時間割を作成しているものの、この問題に関しては良い解決策が導き出せていない。また留学前後のクラスは、共通教育のドイツ語 C の科目があてられているので、単位として必要な学生は多くなく、また専門の時間割を中心に見る 2 年次 3 年次の学生はよほど主体的に Web シラバスを検索しない限りは、その存在に気づかないことが多々ある。それゆえに履修登録期間が始まる前には派遣留学生には個別にメール連絡して周知している。このような現状の改善も今後の課題になる。

4 のように、ドイツへの派遣留学の資格としてドイツ語運用能力の基準やドイツ語の授業の成績を反映するよう求める記述があり、教員の側からではなく、学生の側からこのような声があがったのは、少々意外だった。派遣留学の審査基準についての詳述はここでは避けるが、言語科目（ドイツ語）の履修時間数やその成績、あるいは外部試験の成績等が強く反映される基準にはなっていない。2-3 で言及したように、留学中のドイツ語運用能力向上と留学前のドイツ語の学習時間数との相関関係は指摘でき、留学時に CEFR A2-1 に達していない学生の留学期間中のドイツ語運用能力の向上が思わしくない現状を鑑みると、今後、派遣留学を申請する際には、言語科目の履修状況や成績、あるいは外部試験の成績等も選考する際の基準として加味する必要があるのではないだろうか。また派遣留学が内定した一年後に留学するケースが大半であるが、留学前にドイツ語を履修する時間が少ない学生もごく少数ではあるが存在するのも事実であり、派遣留学内定者には一定時間のドイツ語の履修時間を課すことを検討する必要性もあると思われる。

2-7. 派遣留学の学習支援について（ドイツ）

ドイツ留学を目指す学生の派遣留学までのフローチャートと学習支援について図表 4 のようにまとめた。派遣留学の申請が例年 10 月上旬に開始されるので、標準的な留学モデルと言える 3 年次夏に留学を目指すのであれば、2 年目の前期には準備を始めた方が良いであろう。2 年次夏に派遣留学生として留学を目指す学生も近年増えつつある。そのような学生は留学に対して高い意識を持った学生が多いが、既習者を除けば、初習言語を学ぶことを軸にした派遣留学を目指す場合には、標準モデルである 3 年次に留学する学生に比べ、より手厚いサポートが必要になる。

図表 4：ドイツ派遣留学までのフローチャートと学習支援



以下、アンケートの集計結果や学生の自由記述のコメントを踏まえ、派遣留学を目指す学生に対するこれまでの学習支援体制のポイントを列挙する。

1. 留学前の「派遣準備クラス」（担当：ドイツ語ネイティブ教員）の設置。
2. 留学後の「派遣後クラス」（担当：ドイツ語ネイティブ教員）の設置。
3. 語学指導担当教員の担当に可能な限りドイツ語ネイティブ教員を配置。
4. 「サマーコース」や「カフェ・クラッチ」の情報発信と参加の誘導。
5. ドイツ語技能検定試験の情報発信と対策講座の実施。
6. 「初習言語アワー」の実施。

項目 6 に挙げたように、2016 年度に開始した「初習言語アワー」を通して、ドイツ語を学ぶ初年度の学生に、留学生や派遣留学を経験した学生と知り合う機会を提供した。2017 年度については、悪天候のためか留学生が思うように集まらなかったので、開催時期をもう少し慎重に検討すべきであった。それらの問題点の情報共有を含め、初習言語教員間で協議し、今後どのように実施していくのか検討したい。

今後の課題としては、CEFR に準拠した検定試験の受験者や受験希望者が徐々に増えてきている現状を鑑み、派遣留学の準備の一つとして、ゲーテ・インスティトゥートの検定試験に関する情報発信の機会を増やしたい。派遣留学前の準備クラスの担当教員にも協力を要請し、派遣留学の前に学生が CEFR 準拠の試験問題に接する機会を作る予定である。教員側からの派遣留学生に対する支援の核心は、授業の充実化と学生の自律的学習をサポートする点にあり、この点を軸に支援の拡充を目指す。（早川 文人）

3. アンケートの集計結果および分析（フランス語）

3-1. アンケートの回答者について

フランス語では、2014～2016 年度の派遣学生に加えて、2015 年度の調査実施時に在籍していた 2012 年度、2013 年度の派遣学生にも本アンケートを依頼した。全体で 30 名に依頼し回答者数は 25 名であった。2012～2016 年度にフランス語圏に派遣留学した学生の総数は 34 名であったので、この報告はそのうち 74%の学生の回答に基づくものというこ

とになる。各年度の派遣校別の回答者数は次の表の通りである（括弧内は派遣者数）。

派遣大学	2012	2013	2014	2015	2016	計
ロレーヌ大学	1(2)	2(2)	2(2)	1(1)	1(2)	7 (9)
オルレアン大学	0(3)	1(2)	2(2)	2(2)	2(2)	7(11)
トゥールーズ大学ジャン・ジョレス校			1(2)	2(2)	1(2)	4 (6)
ジャン=ムーラン・リヨン第 3 大学					1(1)	1 (1)
モントリオール大学			3(3)	2(3)	1(1)	6 (7)
計	1(5)	3(4)	8(9)	7(8)	6(8)	25(34)

回答してくれた派遣学生の所属は国際学類 22 名（国際社会コース 9 名・日本語教育コース 1 名・アジアコース 1 名・米英コース 1 名・ヨーロッパコース 10 名）、人文学類 3 名（心理学コース 1 名・言語文化学コース 2 名）であり、国際学類の国際社会コースおよびヨーロッパコースの学生が大多数を占めている。男女比は男子 3 名：女子 22 名で、圧倒的に女子が多い。滞在期間は 2 名が 6 ヶ月であるほかは、8 ヶ月から 12 ヶ月、滞在形態は学生寮が 23 名、ホームステイとアパートが各 1 名であった。

3-2. 留学前の状況

留学前の語学関連授業の履修状況（アンケート I-1.）を見ると、フランス語 A1～A4（初級）のほか、出発前に履修可能な、日本人教員およびネイティブ教員の 2 年生、3 年生を対象とした学類の専門科目はほぼ全員が履修していた。さらに初級の選択科目である「充実クラス」を履修している学生が 12 名、海外語学研修（以下語学研修と略称）に参加している学生が 12 名、これに加えて共通教育科目の B（中級）の単位を取得している場合もあった。

出発時の語学力の目安として、留学前に取得していた外部試験（アンケート IV-12.）の集計結果を示すと、実用フランス語技能検定試験（以下仏検と略称）は、「4 級」1 名／「3 級」8 名／「準 2 級」10 名／「2 級」4 名、CEFR 準拠のフランス語資格 DELF は[A1] 2 名／[A2] 4 名／[B1] 2 名であった。仏検については、模擬試験の実施や語学研修後の仏検合格者に対する単位認定制度等により、情報提供が進んでいることもあり、アンケート回答者のほぼ 9 割が 3 級以上を取得している。DELF の方は、主に語学研修後に、問題形式や問題集の情報を教員から得て、自主的に受験した学生たちである。

留学前の学生が授業以外に行った準備（アンケート I-2.）として多かったのは、フランス人留学生と接する機会をもつことで、チューターを務めた場合も含めると 15 名に上った。ほかには友人らと勉強会を開いた学生が 4 名、仏検の準備や参考書の自習をした学生

が 4 名であった。

教員の事前指導（アンケート I-3.）については、全員が受けているはずであるが、事前指導がなかったと答えた学生が 9 名いた。指導を受けた場合の内容は、現地情報、自習教材、DELF の問題の紹介といった情報提供や定期的な面談による作文の添削、聴き取りの課外授業等であった。

3-3. 留学中の状況

3-3-1. 派遣先大学での受講形態と受講したレベルの推移

フランス語圏の協定校のうち、ロレーヌ大学、オルレアン大学、トゥールーズ大学ジャン・ジョレス校では 2 学期を通じて語学クラスを授業料免除で受講できる。出発時に要求されるレベルは CEFR A1~A2 である。それに対し、ジャン=ムーラン・リヨン第 3 大学では授業料が免除となるのは専門課程のみ、モントリオール大学は 1 学期目は語学クラスが授業料免除となるが、2 学期目は専門課程のみが免除の対象である。これら 2 校で要求されるレベルは CEFR B1 である。なお本学のカリキュラムで普通に勉強している学生にとっては、3 年秋に留学する場合も、留学前に CEFR B1 に達するのは容易ではない。

そのような事情もあり、受講形態（アンケート II-5.）については、回答者の 6 割を超える 16 名が語学クラスのみの受講（ただし、やや専門的な授業を聴講している場合も含む）であった。「初めは語学クラスのみで途中から専門クラスを並行して受講」した 5 名および「初めは語学クラスのみ（4 ヶ月）、途中から専門クラスのみ（4 ヶ月）」を受講した 2 名はモントリオール大学留学者である。また「専門クラスのみ受講」した 2 名はジャン=ムーラン・リヨン第 3 大学とモントリオール大学への派遣者である。

授業時間数は概ね週 16〜20 時間であるが、個人により多少増減があった。クラス規模は 7〜26 名と幅があり、日本人学生の割合は、高い場合がクラスの 30%弱、少ない場合は日本人は本人のみで 5%程度という状況であった。

受講したクラスレベルの推移は、たとえば A1-1 の下線部に見られる下位区分を省略した形でまとめると以下のようになる。

A1→B1　2	A2　2	B1　1	B2→C1　1
A1→B2　1	A2→B1　3	B1→B2　10	
	A2→B2　2	B1→C1　1	

留学終了時のレベルに着目すると A2 が 2 名、B1 が 6 名、B2 が 13 名、C1 が 2 名である。B2 以上で終えている 15 名のうち、留学前に 10 名が充実クラスを履修、8 名が語学研修を履修していた。また留学中に DELF B1 および TCF B1 レベルを取得した学生は 5 名であったが、うち 1 名が充実クラスと語学研修を履修、1 名が研修のみの履修者であった。DELF B2 を取得した学生は 9 名で、うち 6 名が充実クラスの履修者、4 名が語学研

修の履修者であり、両方を履修している学生が 3 名であった。充実クラスや語学研修を受講する学生はモチベーションが高いことも考慮に入れねばならないが、個人差はあるものの、留学前からの授業による学習時間の上乗せが、留学中の学力の向上にも効果的に働いているように思われる。

3-3-2. 留学開始時、留学終了時に力不足を感じた能力

次の表はアンケートの II-6.と II-7.の集計結果をまとめたものである。

	(1)ほとんど感じなかった	(2)少し感じた	(3)強く感じた
読む力	1→9	14→11	10→5
書く力	3→6	6→14	16→5
聴く力	1→7	4→16	20→2
話す力	1→6	1→14	23→5

これによると、留学前に大多数が力不足を強く感じていた「聴く力」と「話す力」については、留学後はかなり進歩しているように見受けられる。ただし、「読む力」を除くと、「少し感じた」割合は留学後も 50%以上である。また出発前の不足について、アンケート II-6.(補)の結果を見ると、文法事項については、「不足をほとんど感じなかった」学生が 11 名いたが、それ以外の能力については大部分が「少し感じた」、「強く感じた」を選択していた。「少し感じた」と「強く感じた」をあわせた人数は、「文法事項」13 名、「語彙数」25 名、「発音の正確さ」24 名、「コミュニケーションの場でフランス語を使用した経験」23 名、「コミュニケーションの場でフランス語を使用する自信」24 名となっていた。特に、語彙数、コミュニケーション経験と自信について、80%の学生が不足を「強く感じた」を選択している点に留意すべきであろう。

3-3-3. 留学中の困難と後輩へのアドバイス

前述の力の不足感と照らし合わせると、留学中の学習上の困難（アンケート II-8.）として、「授業内容の聴き取り（指示が理解できなかった、スピードが速すぎた、語彙力の不足）」（8 名）、「授業中に発言すること（他の学生とのレベルの違いに圧倒された、フランス語で発言することに慣れていなかった）」（4 名）といった、記述が多かったのもうなずける。先に見たように、回答者の 9 割は留学前に仏検 3 級以上を取得しているので、文法はある程度定着しているが、フランス語を使ってコミュニケーションした体験が少ないため、語彙不足もあって、聴解と発話に苦労したと思われる。そこで、アンケート I-4.の後輩に勧める留学前の学習として挙がったのも、「語彙を増やす」（10 名）、「話す力をつける（日常表現の言い方を調べる、会話表現を学ぶ、留学生と交流する）」（7 名）、「聴く力をつける

（ラジオ RFI を聴く、留学生と交流する、フランス映画を見る）」（4 名）等であった。

なお、カナダのケベックのフランス語については、聴き取りに苦労したと答えた学生が 2 名おり、「留学前にモントリオール大学から来ている留学生と交流する、インターネットで調べる等して、ケベックのフランス語にふれておくべき」との意見があった。国際学類の学生の間では、こうした情報は共有されつつあり、昨年度の派遣学生は出発前からモントリオール大学の留学生と積極的に交流して準備していたことを付け加えておく。

3-4. 留学後の状況

3-4-1. 金沢大学に戻ってから高めたいと思った能力

留学後大学に戻ってから高めたいと思った能力（アンケート III-9.）の分布は下記の表の通りである。「少し思った」、「強く思った」を合わせると、項目間の差はあまり大きくない。「強く思った」の割合に注目すると、「e 放送や映画等の内容を聴き取る力」が 68%、「d メール等の私的な文章を書く力」、「f 日常会話の内容を聴き取る力」が 56%、「h 日常会話で自分の意思を伝える力」が 52%、「g 会議等の公的な場で発言する力」が 48%と続く。今回のアンケートでは将来の進路についての希望を問うていないが、フランス語の派遣留学者の大多数を占める国際学類の学生は概ね就職志向であるので、学術論文を読む力、公的な文章を書く力にくらべ、日常的なフランス語の使用における語学力の向上により関心が高いのではないかと推察される。

	(1) ほとんど思わなかった	(2) 少し思った	(3) 強く思った
a 学術論文等を正確に読む力	5	13	7
b 小説・新聞等を速く読む力	3	11	11
c 申請書等の公的な文章を書く力	2	16	7
d メール等の私的な文章を書く力	5	6	14
e 放送や映画等の内容を聴き取る力	3	5	17
f 日常会話の内容を聴き取る力	7	4	14
g 会議等の公的な場で発言する力	3	10	12
h 日常会話で自分の意思を伝える力	6	6	13

3-4-2. 留学後の共通教育科目の受講について

留学後の共通教育科目の受講率（アンケート III-10.）は 56%であった。受講しなかった理由は、「受講したいと思う内容の授業がなかったから」4 名、「受講したいと思ったが時間割の関係で選択できなかった」4 名、「受講したいと思ったが履修上限の関係で選択できなかった」1 名、その他：「就活」2 名であった。現在開講されている科目の中で、

留学後の学生をターゲットとしたものはネイティブ非常勤教員担当のフランス語 C（2018 年度からは専門科目としても履修可能）であるが、曜日・時間帯の変更が難しいこともあり、受講者数は年によってばらつきがある。

3-4-3. 留学後の授業として関心のあるもの

アンケート III-11.によると、学生たちが留学後の授業として強い関心を持っているのは、まず「フランス語圏からの留学生と一緒に学べる授業」である。「大いに関心がある」が 23 名、「少し関心がある」が 1 名であった。続いて「派遣留学経験者のみを対象とする授業」は「大いに関心がある」が 19 名、「少し関心がある」が 4 名、「外部試験（フランス語検定試験・DELF/DALF 等）対策の授業」は「大いに関心がある」が 15 名、「少し関心がある」が 9 名であった。ここではこの結果のみ確認し、次項でより具体的な授業の要望を示しながら、その可能性について述べたい。

3-5. 学習支援の希望と考えられる対応

3-5-1. 派遣留学前、派遣留学後の授業

アンケート IV-13.の自由記述では、派遣前、派遣後の授業の希望として、「会話のクラスの充実」（3 名）、「留学希望者が対象の会話や作文の授業」（1 名）、「DELF/DALF の試験対策の授業」（2 名）、「派遣予定者を対象とした課外授業」（2 名）、「留学経験者対象のディベート等の授業」（3 名）等が挙がった。派遣予定者を対象とした授業については、2017 年度より、派遣前の前期にネイティブ非常勤による DELF A2~B1 レベルのトレーニングを含んだ授業を開講している。また A2~B1 レベルの聴き取りの授業も学類教員が担当している。こちらは課外授業としても行われたようで、「感謝している」という学生の声があった。

派遣帰国者対象の授業の方は、前述のネイティブ非常勤による DELF B2 レベルのディスカッションの授業を数年前から開講しており、シラバスではフランス語圏からの留学生の参加も呼びかけている。実際にジョイント授業にしていくためには、特に第 4 クォーター前に留学生への広報をより積極的に進める必要がある。なお、この授業は学力の高い学生には好評であるが、ディスカッションを難しいと感じる学生は、きめ細かいレベル設定の会話クラスを増やしてほしいと望んでいるようである。しかしながら、ネイティブの専任教員を欠く現体制では、授業という形で、こうした希望に応えるのは難しいように思われる。出発前、帰国後の会話練習は、後に述べるフランス語圏からの留学生との交流の中で行うのがより現実的であろう。

試験対策の授業については、「DELF/DALF の試験対策に特化した授業」の希望の他に「DELF/DALF を大学で受験可能にする」、「学生に DELF/DALF の受験を勧めてほしい」等の意見があった。試験形式や受験の仕方等に関わる情報提供は、派遣留学の広報とともに、今後、充実クラスや語学研修の準備クラスを中心に、早い時期から行なうことが望ま

しいと思う。またアンケートの IV-12.の「留学後に取得した外部試験・取得を希望する外部試験」に、仏検以外に、DELF/DALF ［B2］（6 名）／[C1］（5 名）、TCF（400 点以上）（1 名）が挙がっていたことを考え合わせると、帰国後にも DELF/DALF の受験支援を希望する学生がいるのは確かである。B2 以上のレベルに関しては、何らかの学習支援の方法を検討できればと思う。さらに、DELF/DALF を北陸で受験できる体制作りについては、他大学の教員とも連携して中・長期的に方策を考えていければよいのではないか。

上記以外にも少数ではあるが、「論文や文献を読む訓練」、「論文をフランス語で書くための準備、公的な場での発言の仕方等の支援」、「ビジネスフランス語」等の希望があった。現状では、派遣帰国者向けのビジネスフランス語までは到底手が回らないが、専門課程に留学する学生が論文や文献を読む訓練、論文を書く訓練を必要とする場合は、学類の専門科目や個別指導で対応を考える必要があろう。

3-5-2. 留学生との交流

アンケート IV-13. の自由記述による希望の中で一番多かったのは、ジョイント形式の授業も含め、「派遣前に、協定校から来ている留学生と交流する場を設定してほしい」（5 名）というものであった。これについては、2016 年度から、充実クラス II の授業で、セメスターに 1 回は、留学生、派遣留学予定者、派遣留学経験者を招いて交流するフランス語アワーの時間を設けている。留学やフランス語圏について知る機会として概ね好評で、学生たちはその気になれば、以後 SNS 等でつながることができる。

また 2016 年度に国際学類の留学経験者が、フランス語と日本語による「言語交流会」という学生サークルを立ち上げ、週に一回、昼休みに図書館のカフェで留学生と交流するようになった。このような集いは日本語を学ぶ留学生にとっても有意義だと思われる。教員はフランス語の授業でこうした場についての情報提供を十分に行なうとともに、サークル活動を支援していくことが望ましい。

ネイティブ専任教員が不在という状況では、日本語も話せる留学生は貴重な存在である。特にフランス語教育を専攻している留学生がいる場合には、定期的な会話や文章の添削を有償で依頼することも検討していくべきであろう。

3-5-3. 派遣予定者の自律学習に向けた語学指導教員のコーチング

語学指導教員の指導については、情報提供、作文添削の面談、聴き取りの課外授業が主立ったものであることはすでに述べた。学生たちは授業について様々な希望を持っているが、授業という形でその希望を叶えるのは難しい場合が多い。そこで考えられるのが、個別指導をより丁寧に行なうことである。派遣留学をめざす学生の学力にはかなり幅があるため、当該の学生の学力を見極めた上で、問題集を紹介し、2〜3 週間に一度面談して進捗状況を確認し勉強の仕方等の質問に答える機会を持つとよいのではないだろうか。学力の見極めがつきやすいのは、各教員が授業で担当して来た学生であろう。個人的な経験では、

語学研修に参加した学生やある程度基礎学力のある学生は DELF の問題や問題集の情報を与えると、自分で勉強して、出発前に A2 を取得していた。ただし、学力が不十分な学生の場合は、情報提供だけでは、自習に向かいにくいので、自習ができるところまで伴走する必要があると思われる。現在語学指導教員によって行なわれている情報提供には継続的なチェックを加え、個別面談方式の場合には DELF の問題集の学習もメニューに加えることを提案したい。学生同士で問題集の勉強会を行えるよう、後押しすることも可能であろう。もちろん、レベルと時間の都合が合う学生が複数いれば、課外授業も選択肢ではあるが、もっとも重要なのは、学生が自律した学習者になる支援をすることである。

3-6. 結び

アンケートの結果および教員配置等の現状を踏まえ、以下に派遣留学をめざす学生に対する、考えられる支援のあり方をまとめる。

1)【広報活動】

- １年次から派遣留学制度の広報を行なうとともに、計画的な学力養成に向けて、１年次後半の充実クラスⅠ･Ⅱ､2 年次 9 月に実施しているオルレアン大学フランス語研修、DELF の聴き取りを行なうフランス語 B、DELFA2~B1 の口頭練習を行うフランス語 C といった授業を紹介する。
- 仏検とともに DELF について、試験形式、受験の仕方等についての広報を 1 年次から行なう。語学留学の場合、派遣留学前に仏検準 2 級、DELF A2 の取得を勧める。専門課程への留学の場合は DELF B1 の取得が必要であることも周知する。
- 派遣帰国者対象のフランス語Cに留学生に参加してもらえるよう積極的に広報する。

2)【学生間のネットワークの形成支援】

- フランス語圏からの留学生、派遣留学予定者、派遣留学経験者等の出会いの場を設定し、交流のきっかけ作りを継続的に行なう（フランス語アワー）。これらの参加者を、初学者も含めて、国際学類の学生サークル「言語交流会」に誘導し、サークルの円滑な運営に協力する。

3)【学生の自律学習に向けた支援】

- 派遣留学予定者への語学指導の折には、学力に応じた DELF の問題集の紹介や語彙力の養成に向けたアドバイスを行ない、自主的な学習が軌道に乗るよう、伴走する。
- フランス語圏からの留学生に、日本人学生と定期的に会話したり、文章の添削をすることを、有償で依頼する。

学生の実力養成に向けた目新しい方策があるわけではないが、まずは広報の徹底を心がけ、フランス語圏への関心や学習意欲の高い学生を早い時期からすくいあげて育てることが大切だと考える。留学希望者の多い国際学類を中心として、学生たちのネットワークが形成され、派遣留学経験者のアドバイスが日常的に後輩に届くようになれば、派遣をめざす自律した学習者グループの育成につながると思われる。　（三上 純子）

4. アンケートの集計結果および分析（ロシア語）

4-1. アンケート回答者のプロフィール

金沢大学の派遣留学制度によりロシア語圏に留学した学生のうち、本アンケート調査期間中に在学していた学生は 4 名であり、アンケートには 4 名全員から回答があった。うち 3 名はカザン連邦大学（カザン）、1 名は極東連邦大学（ウラジオストク）に留学した。留学年度は、2013 年度留学が 1 名、2014 年度留学が 1 名、2015 年度留学が 2 名である。1 名は 2 年次秋から留学し、あとの 3 名は 3 年次秋に留学を開始、留学期間は全員 10 ヶ月である。4 名のうち 3 名は、留学期間中ずっと学生寮に住み、様々な国から来たルームメイトと過ごした。また 1 名は、学生寮で短期間過ごしたのち、アパートに移り、その後ホームステイに切り替えた。なお、4 名の金沢大学での所属は法学類（総合法学コース）が 1 名、国際学類（国際社会コース）が 3 名で、全員が女性である。

4-2. 留学前・留学中・留学後のロシア語学習状況

4-2-1. 留学前

留学前、4 名中 2 名はロシア語 B まで履修、残りの 2 名はロシア語 C まで履修した。授業に加え、3 名は、授業外の時間にロシア人留学生と接する機会をつくり、ロシア語を学んだのみならず、のちのロシア留学時に生活面でのサポートをしてもらえるような友好関係を築いた。また 1 名は前年度に短期ロシア語研修で極東連邦大学に滞在し、その経験をもとに 1 年後の同大学への派遣留学を決めた。

留学開始時点でのロシア語能力に関する学生の自己評価は、表 1 のとおりである。

表 1 ：留学開始時に力不足を感じた能力

	ほとんど感じなかった	少し感じた	強く感じた
読む力	1	1	2
書く力	0	1	3
聴く力	0	0	4
話す力	0	0	4

全体として、全員がすべての能力に力不足を感じているが、読む力には相対的に自信のある学生が 2 名いた。この 2 人は、ロシア語 C で論文読解の授業に参加していた学生である。また、書く力に関して他の能力より自信をもっていた学生は、留学前から SNS などを使い、書くことをとおしてロシア語でのコミュニケーションを積極的に行なっていた。

4-2-2. 留学中

留学中、4 名中 3 名はロシア語クラスのみを受講、1 名は途中から並行して専門科目も

聴講した。受講したロシア語クラスのレベルは、留学開始当初の CEFR の B1 相当クラスから、留学終了時の C1 相当クラスへの移行となった学生が 3 名、A2 相当クラスから B2 相当クラスへの移行となった学生が 1 名である。なお、クラスのレベルが学生のレベルに合致しているとは限らず､クラスにやや飽き足らなさを感じることもあった学生もいれば、授業についていくために人一倍努力した学生もいたようである。授業内容は、会話が全体の 3 分の 1 から 2 分の 1 を占め、残りが文法、作文、リスニング、購読、ロシア文化などの授業であった。なお、カザン連邦大学の授業には、金沢大学からの留学生本人以外は日本人はおらず、他方、極東連邦大学ではクラスの半数程度が日本人だった。

4-2-3. 留学後

留学終了時のロシア語能力に関する自己評価は、表 2 のとおりである。全体として、留学開始時よりも自信をつけているものの、対面的なコミュニケーションやアウトプットにおいてはやはり力不足を感じている学生のほうが多い。

表 2 ：留学終了時に力不足を感じた能力

	ほとんど感じなかった	少し感じた	強く感じた
読む力	3	1	0
書く力	1	2	1
聴く力	1	2	1
話す力	1	2	1

留学後、金沢大学でロシア語に関してどのような力を高めたいと思ったかについては、表 3 のとおりである。表 1 と表 2 で力不足に感じる能力として挙がっている聴く力と話す力について、留学後も継続して向上させていきたいという意欲が全員に見られる。

表 3 ：金沢大学に戻ってから高めたいと思った能力

	ほとんど思わなかった	少し思った	強く思った
学術論文等を正確に読む力	1	0	3
小説・新聞等を速く読む力	1	1	2
申請書等の公的な文章を書く力	1	2	1
メール等の私的な文章を書く力	0	2	2
放送や映画等の内容を聴き取る力	0	0	4
日常会話の内容を聴き取る力	0	0	4
会議等の公的な場で発言する力	1	1	2
日常会話で自分の意思を伝える力	0	0	4

こうした意欲を反映するように、留学後に受ける授業の形態として関心があるものはどれかという問いに対しては、以下の表 4 に見られるように、「ロシア語圏からの留学生と一緒に学べる授業」に 3 名が大いに関心をもつと回答した。

表 4： 留学後の授業として関心があるもの

	あまり 関心がない	少し 関心がある	大いに 関心がある
派遣留学経験者のみを対象とする授業	1	3	0
派遣留学経験者と派遣留学希望者を対象とする授業	2	2	0
ロシア語圏からの留学生と一緒に学べる授業	0	1	3
外部試験（ロシア語能力検定試験や TPKИ）対策の授業	2	0	2

4-3. アンケート結果を踏まえて

表 1 から表 4 の各項目への回答からわかるように、学生たちは、留学前も留学後も同じように、対面的なロシア語運用能力（特に話す力・聴く力）を伸ばしたいと思っている。留学で十分経験を積んで成長すると、今度は以前よりも高度なレベルにおいてまた新たな力不足を感じることであろう。そのような必要性に応えるものとして、2016、2017 年度には、他の初習言語科目とともに、ロシア語科目も「初習言語アワー」を開催し、金沢大学で学んでいるロシア語圏からの留学生と、ロシア留学経験者、留学予定者を含むロシア語履修者の交流の場を設け､授業で学んだことを実践で生かしてもらえるよう努めている。またロシア語圏からの留学生がすすんでロシア語学習者の役に立ちたいと申し出てくれることもあり、同様の機会を授業内外において設けてきている。ただし、このような場や授業の時間はごく限られたものであり、会話能力そのものを向上させるにはまったく不十分である。学生たちには、こうした場で知り合ったロシア語話者と授業外で交流することにより、留学前も留学後も、みずからロシア語を使う機会を広げていってほしい。特に、派遣留学が交換留学であることを生かし、日本ではロシア語圏からの留学生をサポートし、ロシアでは逆に助けてもらう、ということも可能であろう（実際に学生たちはそのように実践していた)。

留学中の学習上の困難について、4 名はそれぞれ以下のように記している。

「授業も手続きもすべてロシア語なので、最初が大変でした」

「ロシア語での授業のため、最初は先生が話すことすらも分からず大変でした」

「文法を覚えていてもなかなか会話がうまくできず、もどかしい思いをした」

「読み聴きの語彙は滞在時間に伴って増えたが、自由に話したり書いたりできる言葉やフレーズをなかなか増やすことが出来なかった。基本的な言葉でも、語形変化やアクセントを正確に覚えて使うことが困難だった」

突然に学習の場と実践の場の境界がなくなり、全員が当初は授業内外のどちらにおいても苦労したようである。こうした経験を踏まえ、これから留学する後輩へのアドバイスには以下のようなものがあった。

「発音やリスニングの勉強をしておくとよい」
「自分が困るであろうシチュエーションを想像して、そのときに何を言えばいいのか考えてみると、いざというときに役立つと思います」
「教室でのロシア語と現地のロシア語は違うので、心構えとして、日本にいるうちからYouTube などでロシア語に十分触れておくとよい。ロシアに行って驚かないようにするためなので、内容はわからなくてもよい」
「筆記体を覚えていったほうがよい」

このように、留学生にとってはあきらかに、日々を切り抜けていくためのプラクティカルな能力を高めることが最重要課題である。ロシア語科目では、部分的にではあるが、こうした意見や、想定される留学時の困難に対応するような授業づくりに努めている（ネイティブ教員による授業の開講や、ロシアで遭遇するであろうシチュエーションを設定したコミュニケーションの授業、2 年次の授業からの筆記体使用など)。上述の「初習言語アワー」の試みも、同様の方向での支援となっている。

ただし後輩へのアドバイスのなかには以下のような記述もあった。「文法をしっかり身につけておけば、現地の授業にも十分についていけるし、早く話せるようになるので、教科書をよく復習しておけば良いと思います」、「基本的な文法はしっかり頭に入れておくべきで、簡単な会話もできるとさらに良いと思います」。習得に時間がかかり、無味乾燥な座学に終わってしまいがちの文法であるが、留学経験者にとってその学習は実践的なコミュニケーションから独立したものではなく、実践のなかでつねに起動し、実践能力の効率的な向上に役立っているもののようである。

また、もう一点着目しておきたいのは、表 3 にあるように、4 名中 3 名が留学後に「学術論文等を正確に読む力」を高めたいと思ったということである。読む力には相対的に自信のある学生たちであるが、ロシア語 C で学術論文を読んだり、ロシアに関係するテーマで卒業論文を執筆することなどから、さらなる能力の向上を求めているようである。こうした意欲も、研究という「実践」のなかから生まれてくるものであり、学生たちの普段の活動に内在するものである。時間の限られた大学の授業では、特にこうしたより高度な実践の意欲が引き出されるべきであり、それによって、これから行う留学、あるいはすでになされた留学の経験がいっそう有意義なものに高められていくべきだろう。

最後に、表 4 で 2 名が「大いに関心がある」としていた「外部試験（ロシア語能力検定試験や TPKИ）対策の授業」については、それだけで単独の授業を開講することはむずか

しいが、これまでよりも多めに授業に取り入れてもよいのかもしれない。なお、アンケート回答者の外部試験の取得状況は以下のとおりである。

留学前	ロシア語能力検定試験 4 級	2 名
留学中	ТРКИ 第 1 レベル（CEFR B1）	2 名
	ТРКИ 第 2 レベル（CEFR B2）	1 名
留学後	ТРКИ 第 2 レベル	1 名
	ロシア語能力検定試験 2 級	1 名

（平松 潤奈）

5. アンケートの集計結果及び分析（中国語）

5-1. アンケート回答者

本アンケート回答者は、2014 年度～2017 年度金沢大学中国語圏派遣留学生（総数 22 人）のうちの 14 名（内訳：人文学類 3 名、経済学類 1 名、国際学類 10 名）である。派遣留学先及び留学期間は表 1 に示された通りである。

表 1：本アンケート回答者の派遣留学先及び留学期間

大学名	人数（滞在期間）
蘇州大学	2 （5 ヶ月）
大連理工大学	1（11 ヶ月）
東華大学	1（11 ヶ月）
南京大学	2（10 ヶ月）
北京語言大学	1（11 ヶ月）
北京師範大学	2（10 ヶ月）
南開大学	1（11 ヶ月）
台湾師範大学	1 （6 ヶ月） 2（10 ヶ月）
台湾大学	1（10 ヶ月）

5-2. 留学前の状況

回答者 14 名のうち、留学前において金沢大学の語学関連授業の取得状況は、中国語 A は全員履修済み、中国語 A（充実クラス）及び中国語 B はそれぞれ 10 名、中国語 C は 4 名、中国語コミュニケーションは 12 名が履修済みであった。

中国語圏への留学を希望する受講生に対する語学相談においては、中国語 A（充実クラス含む）の履修、可能の限り中国語 B の履修を強く薦め、それと関連して外部試験を日本中国語検定協会が主催する中国語検定試験（以下「中検」と略す）について、留学前は 3

級、留学後は 2 級の取得を目指すよう指導し、また中国政府が公認する HSK の取得も薦めている。今回のアンケート回答者は、ほぼ 9 割の派遣留学生がその指導に沿って、留学前後の語学学習プランを立てて実施していたと見受けられる。（表 2 参照）

授業以外に行なった勉強については、中国人留学生のチューターを務めた人は 5 名、中国人留学生と接する機会を作った人は 8 名、友人らと勉強会を開いた人は 2 名、語学系サークルに入った人は 1 名であり、留学までに半数以上の学生が授業外において中国語関連の自主勉強が行われていたと見受けられる。

5-3. 留学中の学習状況

派遣先大学での受講形態については、まず語学クラスのみの受講者は 8 名であり、留学開始時から終了時までの受講クラスのレベル推移は、B→D は 2 名、C→D は 4 名、D→E は 1 名であった。

また、語学クラスと専門クラスを並行しての受講は 6 名であり、そのうち初めからの並行受講は 3 名、途中からの並行受講は 3 名であった。

一年間ないし半年の留学を経て、受講クラスのレベルの推移及び専門授業の並行受講によって中国語能力の向上をはかり知ることができるが、外部試験の取得状況からも留学による語学スキルのアップも示されたと考えられる。（表 2）

表 2：外部試験取得状況

質問 No.	質問内容	回 答	
12	外部試験について		
	留学前に取得していたもの	中国語検定試験 4 級	2
		中国語検定試験 3 級	10
		中国語検定試験 2 級	1
		HSK	0
	留学中に取得したもの	中国語検定試験	
		HSK5 級	5
		HSK6 級	5
	留学後に取得したもの・取得を希望するもの	中国語検定試験準 1 級	4
		中国語検定試験 2 級	9
		HSK5 級	4
		HSK6 級	7

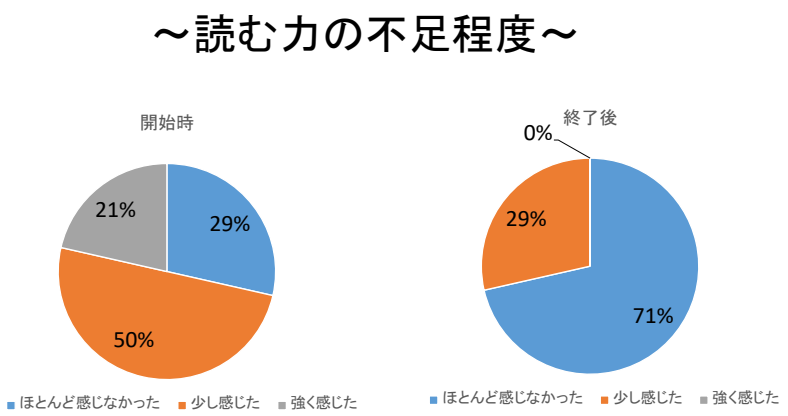
検定試験による資格の獲得が学習モチベーションに大きな働きかけがあることは、どの言語学習においても共通のことである。中国語班は検定試験の資格獲得を含め、語学学習

の四技能（読む、書く、聴く、話す）のレベルアップを目指し、授業内外におけるより効果的且つ実施可能な学習支援を派遣留学生に提供できるように、特に、留学前後の学習過程における学生自身が感じた語学能力の不足を重視し、そこで見えてくる学習実態を基に今後実施可能な学習支援を究めて行きたい。

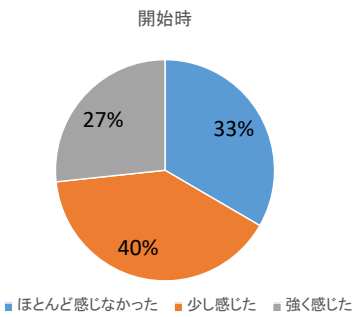
5-4. 留学開始時・終了後に感じた能力の不足程度

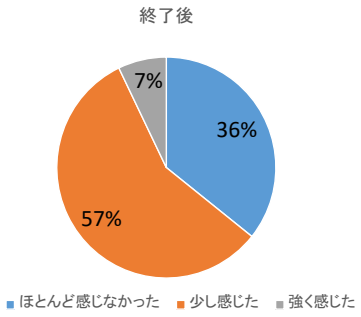
「留学開始時・終了時に感じた読む、書く、聴く、話す能力に感じた不足程度の比較」（グラフ 1）に示されているように、まず読む力で不足を「強く感じた」人が留学後いなくなり、「ほとんど感じなかった」人が留学前の 3 割弱から留学後の 7 割強に倍増した。読む力は留学中においてかなり伸びたと思われる。書く力は読む力ほど伸びてはいなかったが、不足を「ほとんど感じなかった」人の割合が留学前後に変化がなく、不足を「強く感じた」人が 2 割減で、不足を「少し感じた」人が 2 割弱増であった。聴く力については留学前に 8 割が不足を「強く感じた」が、留学後見事にそれがなくなり、「ほとんど感じなかった」と「少し感じた」の 5 割ずつに変わった。そして話す力は、留学前の不足を 9 割強「強く感じた」から留学後の 8 割強の「少し感じた」に変わり、読む・聴く力が飛躍的にアップしたのに比べて、書く力と特に話す力において不足を「少し感じる」の割合は依然として高いことが分かった。留学前後における学生自身が感じたこれらの不足が直接的に、後に挙げる「留学後に高めたい能力の程度」、「留学後に興味がある授業」にも連動して継続学習の意欲及び方向性が反映されている。

グラフ 1：留学開始時・終了時に感じた読む、書く、聴く、話す能力に感じた不足程度の比較

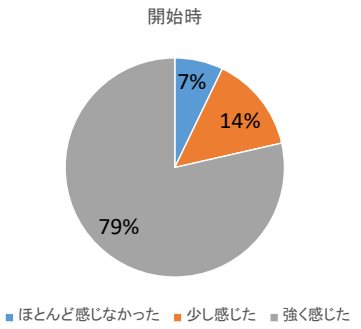


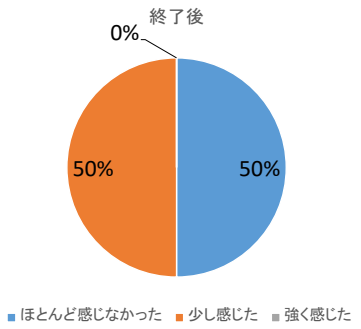
～書く力の不足程度～



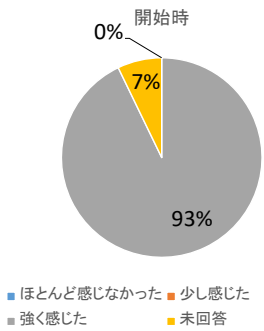


～聴く力の不足程度～





～話す力の不足程度～



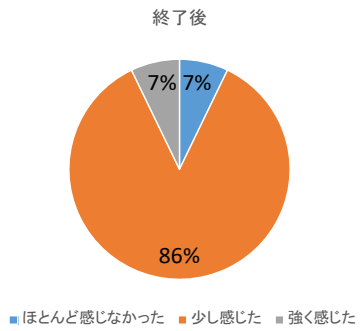


表 3：留学後に高めたい能力の程度

	ほとんど思わなかった	少し思った	強く思った
学術論文等を正確に読む力	4	8	2
小説・新聞等を速く読む力	2	7	5
申請書等の公的な文章を書く力	5	7	2
メール等の私的な文章を書く力	3	4	7
放送や映画等の内容を聞き取る力	2	4	8
日常会話の内容を聴き取る力	6	1	7
会議等の公的な場で発言する力	2	5	7
日常会話で自分の意志を伝える力	3	1	10

表 4：留学後に興味がある授業

	あまり関心がない	少し関心がある	大いに関心がある
派遣留学経験者のみを対象とする授業	4	1	8
派遣留学経験者と派遣留学希望者を対象とする授業	3	4	6
中国語圏からの留学生と一緒に学べる授業	1	0	12
外部試験対策の授業	1	3	9

5-5. 留学後高めたい能力の程度、興味がある授業

表 3 に示されているように、半分以上の参加者が留学後高めたい能力に「少し思った」のは「学術論文などを正確に読む」、「小説・新聞などを速く読む」、「申請書等の公的な文章を書く」力で、「強く思った」のは「メール等の私的な文章を書く」、「放送や映画等の内容を聞き取る」、「日常会話の内容を聞き取る」、「会議等の公的な場で発言する」、「日常会話で自分の意志を伝える」力で、特に「日常会話で自分の意志を伝える」力については、14 人中 10 人も強く高めたい意志があった。

表 4「留学後に興味がある授業」に「大いに関心がある」のは、「派遣留学経験者のみを対象とする授業」、「外部試験対策の授業」、「中国語圏からの留学生と一緒に学べる授業」

で、特に 14 人中 12 人が「中国語圏からの留学生と一緒に学べる授業」を強く希望されている。

時代の変遷は電子媒体の発達、エンターテインメント業界の盛んな交流を招き、発信元と同一言語でその内容を理解し、楽しみたいという学習モチベーションの向上が見られる一方、留学によって自らその言語で発信してあげたい相手が増え、自らの情報を伝えたい意志もそこで高まったことも読み取れる。そこで語学学習の目的が、学術的あるいは専門的にその言語を究めることではなく、その言語による高度な理解及び自己表現を目指すことも顕著になったことが、留学後高めたい能力の程度と大いに関心がある授業からうかがえる。

5-6. 後輩へのアドバイス

これから留学にむけて準備する後輩へのアドバイスとして、主に以下の四つの点からのアドバイスがあった。特に「日中文化」の項目については、後輩へのアドバイスとは言え、留学先の文化、自国の文化を知ることの大切さを留学によって認識できたことは、語学学習を通して異文化理解の深化、自文化への目覚めが達成されつつあると言えよう。ここで学生による記述の一部分をそのまま以下に掲載する。

【リスニングとスピーキング】

- 私は日本で文法に重点を置いて勉強していたのですが、留学直前はもっとスピーキングに比重を置いて勉強するべきだったと後悔しています。
- リスニングと会話練習に重点をおいて勉強することをおすすめします。
- リスニング能力等を鍛える為中国語のアニメやドラマを見ておくのもよいと思う。
- 会話！！！！！！！！！！

【文法】

- 基礎の勉強。特に文法や単語。
- 単語を覚える、基本的な発音。
- 生活で使う分野単語を覚えていくこと。
- 単語はできるだけ覚えていくべき。最初使ったり聞き取れなくても後々慣れた頃に役立つ。
- 文法的な部分は日本にいる間に押さえておいた方が良い。

【検定試験】

- 検定を受けておくこと。耳を慣らしておくこと。
- HSK を取得していると、編入試験が免除されるのでおすすめ（5 級以上）。

【日中文化】

- 中国語の勉強をすることももちろん大切だが、あらかじめ留学先の国の政治、文化について勉強しておくことも大切だと思った。

- 日本について知っておく、留学生と会話練習。
- 日本のことを中国語で説明できるように知識をつけておくと、留学中に討論をする際に役立つと思います。

5-7. 教員・大学に望むこと

学習支援という点で派遣留学生から教員と大学に以下のような要望が挙げられている。

① 中国人留学生と一緒に授業をうけたい
② 中国語による会話や討論のような経験を積みたい
③ 1、2 年次に履修できる基礎の授業をもっと増やしてほしい
④ 繁体字も少し勉強したい
⑤ 留学後中国語による中国の歴史や文化について学ぶ授業がほしい

中国語学習に関して、日本人留学生は他国の留学生より読む・書くという点では優位であり、文法や語彙についても他国の留学生よりも習熟度は高いが、その反面、話す・聞くという面について差が大きいことは、中国語教育における従来の課題であるが、今回のアンケート記述文に見る学生たちの体験談及び自己認識から改めてその課題を認識することが出来た。教員側としては、日本人学生の学習支援に当たって、知識に見合った自信を持って現地で積極的に発言出来るようになるには、5-2. でも述べたように留学を計画する時期から中国語 A（基礎文法・会話表現）、中国語 B（中級文法・会話表現）までの学習・履修がまず必須であり、また留学準備期間において、中国語 B ないし中国語 C（上級）の授業や中国人留学生との学習イベントに積極的に参加し、自己表現のレベルアップ、中国語による討論を経験するなど、効果的な学習プランを立てるべきだと思う。回答者の中に、「中国語 B を受講したいが、時間割の関係で選択できなかった」との声がいくつかあったが、学習支援という点で今後派遣留学生全員が留学前における中国語 B の受講、そして留学後のレベル維持における中国語 C の受講が可能になるような履修形態を検討すべき項目として取り上げたい。

一方、「教員・大学に望むこと」のみならず、前述の各項目にも見受けられるように、中国人留学生と一緒に授業を受けたい気持ちがとても強く語られている。学生の記述によると、教員以外のネイティブの話し方やスピードに慣れたいこと、そしてキャンパス内に中国人留学生が多くいるのに互いに接する機会があまりないこと、さらに記述の中には個人の経験として、中国人留学生と知り合ったことで良い留学準備ができ、現地で有意義な留学生活を送った成功例も挙げられている。

今回のアンケート回答者の 14 人中 9 人がすでに社会人になり、彼らへの追跡調査の中で在学中に中国語のどの力を伸ばしたかったかとインタビューしたところ、

① リスニング能力は帰国して最も低下したと感じ、リスニング能力の維持と向上が必要だ

② 中間のレベルの中国語で進行する授業がもう少しあればいい
③ 会話力を伸ばしたかった。会話は在学中だからこそ伸ばせる機会がある力で、もっと周りの中国人と交流する機会を作ればよかった

のように、社会人になってからの考えがより現実味を帯びているが、語学練習の相手及び場所をもっと提供できるように、今後の授業改善、学習支援を図るべきだと考える。

本プロジェクトのまとめに、初習言語においては 2016 年度から「初習言語アワー」という授業内において留学生との交流及び会話練習の場を設けた学習イベントが定期的に開催されていると報告される。実際に 2017 年度の「初習言語アワー」（中国語）に参加した日本人学生に開催後に中国人留学生との交流状況を確認したところ、授業中においては中国人留学生と満足した良い交流ができたが、それ以後に授業外における交流はほとんどなかったと報告された。

派遣留学を考える学生そして派遣留学から帰ってきた学生への継続可能な学習支援において、教員側に求められているのは教授内容の深化のほかに、学生の学習姿勢及び学習進行状態への確認及びコーチングが常に必要となってくると考えられる。また学生の該当科目の履修時間の確保、交流場所の定期的な提供が大学に求められることになるだろう。

「もっと学生に発破をかけて、そうじゃないと勉強しないので…。」と学生がアンケートに書いたように、教員の「発破をかける」役割が学習内容、学習ルートが多様化する現代社会においてより重要になってくるかと思う。

（趙 菁）

6. まとめ

以上、4 言語におけるアンケート結果と分析を見た。

最後に、既に上記分析内で何度か言及のあった「初習言語アワー」についての報告と簡単なまとめを行ないたい。

6-1.「初習言語アワー」

「初習言語アワー」とは、プロジェクト初年度のアンケートにおいて独仏露中 4 言語全てに共通していた「留学していた言語圏から来た外国人留学生と一緒に学べる授業」への学生の強い期待を受けて実施した学習支援である。これは、2016 年度・2017 年度の 2 年において、語学研修や派遣留学を志す学生を主たる対象とし、学生同士の主体的・積極的コミュニケーションを目的として、授業内において本学学生と留学生との交流および会話練習の場を設けたものである。

2 年間の記録を表にまとめると次のようになる。

2016 年度

言語名	実施日時 授業時限	授業科目名	参加学生数	
			日本人	留学生
ドイツ語	12 月 5 日 5 限	ドイツ語 A（充実クラスⅠ）	20 名 （1 年生 18 名、派遣留学帰国者 2 名）	3 名 （レーゲンスブルク大学 2 名、デュッセルドルフ大学 1 名）
中国語	12 月 7 日 2 限	中国語 A（充実クラスⅡ）	9 名	6 名 （出身地：台湾 1 名、マレーシア 1 名、本土 4 名〔瀋陽、甘粛、山東、浙江〕）
フランス語	12 月 12 日 5 限	フランス語 A（充実クラスⅡ）	11 名 （1 年生 6 名、2 年生 1 名、派遣帰国の 4 年生 4 名）	6 名 （オルレアン大学 1 名、トゥールーズ大学ジャン・ジョレス校 2 名、リヨン第 3 大学ジャン・ムーラン校 2 名、モントリオール大学 1 名）
スペイン語	1 月 10 日 3 限	スペイン語 A3	40 名	1 名 （スペイン人女性）
	1 月 10 日 5 限	スペイン語 C	11 名	2 名 （アルゼンチン人女性、エル・サルバドル人男性）
ロシア語	1 月 19 日 3 限	ロシア語 B	6 名	1 名 （カザン連邦大学）
朝鮮語	朝鮮語では非常勤講師担当の B や C の授業に韓国人留学生が毎年 1、2 名参加しており、日頃からジョイントの授業が行われている。また、K フレンズという文化サークルでも交流が行われている。12 月 16 日に留学生と日本人学生のコンパを開催。			

2017 年度

言語名	実施日時 授業時限	授業科目名	参加学生数	
			日本人	留学生
ドイツ語	1 月 15 日 5 限	ドイツ語 A（充実クラスⅠ）	28 名 （1 年生 23 名、派遣留学帰国者 5 名）	1 名（デュッセルドルフ大学）
中国語	12 月 13 日 2 限	中国語 A（充実クラスⅡ-1）	11 名 （国際 5 名、人文 5、法 2 名）	3 名 （上海海洋大学、蘭州交通大学、安徽池州学院）
フランス語	12 月 18 日 5 限	フランス語 A(充実クラスⅡ)	22 名 （1 年生及び派遣留学予定者 15 名、派遣留学帰国者 7 名）	6 名 （トゥールーズ・ジャン・ジョレス大学 1 名、ロレーヌ大学 1 名、ジャン・ムーラン・リヨン第 3 大学 2 名、モントリオール大学 1 名）
スペイン語	12 月 21 日 4 限	スペイン語 A4-2	35 名	1 名（メキシコ）
ロシア語	7 月 4 日 3 限	ロシア語 B	7 名（留学経験者 1 名、留学予定者 3 名、他 3 名）	1 名（極東連邦大学）
	7 月 5 日 4 限	ロシア語 C	5 名（留学経験者 1 名、留学予定者 3 名、他 1 名）	1 名（極東連邦大学）
朝鮮語	朝鮮語では非常勤講師担当の B や C の授業に韓国人留学生が毎年 1、2 名参加しており、日頃からジョイントの授業が行われている。また、K フレンズという文化サークルでも交流が行われている。K フレンズの活動として、12 月 8 日に韓国の留学生も参加してカラオケ大会を行った。また、12 月 22 日には K フレンズの忘年会を実施した。			

この初習言語アワーに対しては、日本人学生・外国人留学生ともに好感触であり、「今後も続けて欲しい」との声が上がっている。初習言語アワーの最大の利点は、当該言語を用いて会話をする対象が教員という単位授与者ではなく、同世代の学生同士であることで、互いの興味関心のある話題についてリラックスして臨めることであろう。また、現地に関する最新の情報も入手しやすく、初習言語アワーを機に継続的な交友関係を結ぶことができれば、留学そのものや留学先国家・地域への不安なども払拭できる。

ただ、実際には授業内での実施であるということから、授業設計と学習進度との関連及び時期設定、更には忙しい留学生に来てもらうことの困難など、実施に関する問題は少なくない。

6-2. 今後の課題――「自律／自立」した学習者の養成

派遣留学生に対する効果的な学習支援については、定型の正解などというものがない中で、今後も大きな課題として試行錯誤しつつ進めていかざるを得ない。その意味から言えば、本プロジェクト「初習言語の派遣留学生の実力養成に向けた効果的なサポート体制（授業内・授業外）の構築を目指して」には現段階では答えがない。

能力差のある外国語中上級学習者のレベルアップは、「文字を憶えた」、「発音できるようになった」、「基礎的な文法で作文できるようになった」という初級者の比較的一律である達成感や充実感とは異なり、一筋縄でいくものではなく、個別の指導やアドバイスが必要になる。とりわけ、教員を「いつでも自分達の能力に見合った授業を提供してくれる」存在として見ている学習者の「自律／自立」を促すのは殊に難しい。しかし、学習者が最終的には「自ら律し、自ら立つ」ことが求められるのは、外国語に限らず、どの分野の学習においても同様であろう。自らの能力を客観的に見定め、欠点を補い、より高次のレベルを目指すためには、当然授業外での主体的な学習が最も重要となる。

この学習者の「自律／自立」をとりあえずの目標とした場合、本学の現体制では、学生に少なくとも 3 年次後期或いは 4 年次前期を目途に、共通教育言語科目の B、C の修得を目指してもらいたい。その間に派遣留学をする学生は半年から一年の留学を挟むことになるが、言語科目 C は帰国後も学習を継続するための受け皿ともなっている。ただ、学生自身が履修の継続を望んでも、専門科目や教職科目といった学生の卒業や進路と密接に関わりのある科目の時間割との兼ね合いで「受講したくても無理」という状況は防げない。これには全学的に（とまではいかなくても、せめて文系学類の集中している人間社会学域においては）初習言語科目 B、C のための授業時間帯が欲しいところであるが、様々な制度・カリキュラム上の制約は大きく、現状では実現可能な段階ではない。

我々教員の役割は、学習者の背中をそっと押し、「自律／自立」への支援をすることである。手を放して飛び立っていく学生を見送るべく、我々は終わりなき模索を続けていくことになるだろう。

（杉村 安幾子）

参考文献
・「平成 29 年度金沢大学派遣留学報告書」、金沢大学国際機構支援室、2017
・「STUDY ABROAD 2016　KANAZAWA UNIVERSITY～金沢大学生のための派遣留学の手引き～」、金沢大学国際機構支援室、2017

【資　料】

派遣留学に関するアンケート[4]

氏名

性別　　☐男　☐女

※☑男のように、☑をコピーして貼り付けてください（以下同じ）

所属・学年　（　　）学類　（　　）コース等・（　）年

派遣先大学

派遣期間

住居の形態（☑を貼り付け）

☐学生寮　☐ホームステイ　☐アパート等　☐その他(具体的に:　　)

（補）ルームメイトがいた方へ：ルームメイトの国籍は？（　　）

Ⅰ　留学前

１. 留学前に受講した語学関連の授業は何ですか？(該当するものすべてに☑を貼り付け)

なお、科目名の後に（教員名：　）とあるものについては、担当教員名を記入してください。

☐ ○○語Ａ１～Ａ４
☐ ○○語Ａ（充実クラス）
☐ ○○語Ｂ（教員名：　　）
☐ ○○語Ｃ（教員名：　　）
☐ ○○語コミュニケーション IA/IB（教員名：　　）
☐ ○○語コミュニケーション IIA/IIB（教員名：　　）
☐ ○○語コミュニケーション IIIA/IIIB（教員名：　　）
☐ ○○語コミュニケーション IVA/IVB（教員名：　　）
☐ 海外語学研修
☐ 海外インターンシップ
☐ その他（具体的に：　　）

（補）○○語Ｂを受講しなかった方へ：なぜ受講しなかったのですか？

---

[4] このアンケートについては、2017 年 3 月に定年退職された矢淵孝良教授が原型を作成して下さった。本プロジェクトはこの報告記執筆者だけでなく、矢淵孝良教授による多大な貢献の下に進められた。この場を借りて執筆者一同、矢淵孝良先生にお礼を申し上げます。

☐ 受講したいと思う内容の授業がなかったから
☐ 受講したいと思ったが時間割の関係で選択できなかったから
☐ 受講したいと思ったが履修上限の関係で選択できなかったから
☐ シラバスを読んで内容が難しすぎると思ったから
☐ シラバスを読んで内容が易しすぎると思ったから
☐ その他（具体的に：　　）

２．授業以外に何か勉強しましたか？（該当するものすべてに☑を貼り付け）
☐ 語学学校・語学教室に通った
☐ ○○語圏からの留学生のチューターを務めた
☐ チューターではないが、○○語圏からの留学生と接する機会を作った
☐ 語学系サークルに入った
☐ 友人らと勉強会を開いた
☐ その他（具体的に：　　）

３．教員からの事前指導はありましたか？（☑を貼り付け）
☐ あった
☐ なかった
「あった」という方はその内容を簡単に記してください。

４.後輩へのアドバイスとして、留学前にどのような勉強をしておくべきだと考えますか？

Ⅱ　留学中

５．派遣先大学ではどのようなクラスを受講しましたか？（☑を貼り付け）
☐ ずっと語学クラスのみ受講
☐ 初めは語学クラスのみで途中から専門クラスを並行して受講
☐ 初めは語学クラスのみ（　ヶ月）、途中から専門クラスのみ（　ヶ月）受講
☐ ずっと専門クラスのみ受講
☐その他（具体的に：　　）

（補）受講した「語学クラス」についての質問です。
①受講したクラスのレベルは留学開始時から終了時（途中を含む）まで、どう向上しましたか？※開講されていたクラスのレベルを A1→C2（低→高）として、例えば（A2-1）→（A2-2）→（B1-1）のように答えてください。

（　）→（　）→（　）→（　）

②受講した授業の内容と授業時間を答えてください。
※該当しないものは（０）を記入し、受講したコースごとに答えてください。
※例えば 45 分の授業であれば、それを１時間と数えてください。

	（　）月～（　）月	（　）月～（　）月	（　）月～（　）月	（　）月～（　）月
・会話	週（　）時間	週（　）時間	週（　）時間	週（　）時間
・文法	週（　）時間	週（　）時間	週（　）時間	週（　）時間
・作文	週（　）時間	週（　）時間	週（　）時間	週（　）時間
・講読	週（　）時間	週（　）時間	週（　）時間	週（　）時間
・リスニング	週（　）時間	週（　）時間	週（　）時間	週（　）時間
・その他（　　）	週（　）時間	週（　）時間	週（　）時間	週（　）時間

③クラスメイトのうち、日本人学生は何名、外国人学生は何名でしたか？
※受講したコースごとに答えてください。″

・日本人学生　（　）名　（　）名　（　）名　（　）名
・外国人学生　（　）名　（　）名　（　）名　（　）名

６．留学開始時、以下の能力について、どの程度の力不足を感じましたか？（数字を記入）
※（１）ほとんど感じなかった　（２）少し感じた　（３）強く感じた
・読む力（　）
・書く力（　）
・聴く力（　）
・話す力（　）

（補）上の質問に関連し、以下の点について、どの程度の不足を感じましたか？（数字を記入）
※（１）ほとんど感じなかった　（２）少し感じた　（３）強く感じた
・文法事項に関する知識　（　）
・語彙数　（　）
・発音の正確さ　（　）
・コミュニケーションの場で〇〇語を使用した経験　（　）
・コミュニケーションの場で〇〇語を使用する自信　（　）
・その他（具体的に：　　）　（　）

７．留学終了時、以下の能力について、どの程度の力不足を感じましたか？（数字を記入）
※（１）ほとんど感じなかった　（２）少し感じた　（３）強く感じた
・読む力（　）

・書く力（　）
・聴く力（　）
・話す力（　）

８．留学中、学習上の困難を感じたことがあれば書いてください。

Ⅲ　留学後

９．金沢大学に戻ってから、どの程度、以下の能力を高めたいと思いましたか？（数字を記入）

※（１）ほとんど思わなかった　（２）少し思った　（３）強く思った

a 学術論文等を正確に読む力　（　　）
b 小説・新聞等を速く読む力　（　　）
c 申請書等の公的な文章を書く力　（　　）
d メール等の私的な文章を書く力　（　　）
e 放送や映画等の内容を聴き取る力　（　　）
f 日常会話の内容を聴き取る力　（　　）
g 会議等の公的な場で発言する力　（　　）
h 日常会話で自分の意思を伝える力　（　　）
i その他（具体的に：　　）　（　　）

10. 留学後、〇〇語Ｃ等の共通教育科目を受講しましたか？（予定を含む）（☑を貼り付け）

☐ 受講した
☐ 受講しなかった

（補）「受講しなかった」方へ：なぜ受講しなかったのですか？（☑を貼り付け）

☐ 受講したいと思う内容の授業がなかったから
☐ 受講したいと思ったが時間割の関係で選択できなかったから
☐ 受講したいと思ったが履修上限の関係で選択できなかったから
☐ シラバスを読んで内容が難しすぎると思ったから
☐ シラバスを読んで内容が易しすぎると思ったから
☐その他（具体的に：　　）

11. 留学後の授業として、どの程度、以下のような授業に関心がありますか？（数字を記入）

※（１）あまり関心がない　（２）少し関心がある　（３）大いに関心がある

a 派遣留学経験者のみを対象とする授業　（　）
b 派遣留学経験者と派遣留学希望者を対象とする授業　（　）

c ○○語圏からの留学生と一緒に学べる授業　　（　）
d 外部試験（○○語検定試験等）対策の授業　　（　）
e その他（具体的に：　　）　　（　）

Ⅳ　その他

12. 外部試験についての質問です。（該当するものに数字等を記入）

①留学前に取得していたものはありますか？
・○○語検定試験（　）級
・その他（具体的に：　　）

②留学中に取得したものはありますか？
・○○語検定試験（　）級
・その他（具体的に：　　）

③留学後に取得したもの／取得を希望するものはありますか？
・○○語検定試験（　）級
・その他（具体的に：　　）

13. 派遣留学に関連し、特に学習支援という点で教員・大学に望むことを書いてください。

※注記　各言語で授業形態などが異なるため、上記のアンケートはあくまでも原型であり、実際の調査の際には言語ごとに異なる設問や選択肢があったことをお断りしておく。